

「チャリティーの心」

04. **Charity** suffereth long, and is kind; **charity** envieth not; charity vaunteth not itself, is not puffed up,

13. And now abideth faith, hope, **charity**, these three; but the greatest of these is **charity**.

(King James Version: 1 Corinthians Chapter 13)

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。妬まない。愛は自慢せず、高ぶらない。」

(聖書協会協同訳 Iコリント13:4)

「信仰と、希望と、愛、この3つはいつまでも残ります。その中で最も大いなるものは、愛です。」

(聖書協会協同訳 Iコリント13:13)

先日、幼稚園の園児さんのある保護者の方から伺ったお話を紹介します。その方は、写真撮影などのお仕事でキリスト教の結婚式でよく朗読される「愛」についての聖書のみ言葉を「素敵な言葉だな」と思っていたそうです。ある時に「愛」は「Love」ではなく「Charity」である事を聞いたそうです。それはどういう意味なのだろうかという事でした。私はその話を伺った時に「charity」と訳されている英語の聖書はあるのだろうかと気になり、すぐに調べてみました。すると、『King James Version』(略称 KJV)、日本語で『欽定訳』と呼ばれる聖書の訳が「Love」ではなく「Charity(チャリティー)」となっている事を知りました。『KJV(欽定訳)』は、1611年に時の英国王ジェームズ王の命令によって翻訳された聖書です。欽定訳は19世紀末に至るまでイングランド国教会(聖公会)で用いられた唯一の公式英訳聖書です。また、荘厳で格調高い文体から、口語訳の普及した現在も多くの愛読者を保ち続けているそうです。キリスト教は「愛」の宗教です。主イエスは私たちを愛してくださっています。その愛は見返りを一切求

めない愛です。「チャリティー」は「慈善」「施し」「親切」などと日本語に訳されます。「チャリティーバザー」「チャリティー募金」はある目的(災害救援、困窮支援)を掲げて行うものです。一切の見返りを求めずにすべてを目的のために捧げることが本来のあり方なのだと思います。

結婚式で読まれる愛について書かれたコリントの信徒への手紙 I 13章1-13節の「愛」を「チャリティー」と読み替えて見ると聖書が私たちに伝えようとする真の意味が理解出来ると思いますが、皆様はどのように感じるでしょうか。私は目から鱗が落ちるほど新鮮な響きをもってこの箇所を今読んでいます。夫婦関係、親子関係、友人関係、家族関係、すべての人間関係において私たち一人一人が「チャリティーの心」を持つことが出来ればと願いますがとても難しいですね。それでも、私たちは「神の国の到来」(Charityが満ちている状態)を待ち望んでいます。あきらめず、何度でも反省しつつ、お互いに「チャリティー」の心で日々生きていきたいものです。

(司祭 越山哲也)